

契 約

— その未開形態 —

増 田 福 太 郎

- 第一 は し が き (未開人の契約)
- 第二 物を与える契約
- 第三 物を借りる契約
- 第四 人を雇う契約
- 第五 む す び (契約の機能)

第一 はしがき (未開人の契約)

一 現存未開民族の現状は、もとより人類の原始状態をそのまま示すものではない。世上、彼等未開文明の人々を原始人と称し、彼等の社会を原始社会というのは、ややもすると誤断に導きやすい語である。彼等は今なお未開文明の状態にこそおれ、その背後には、少くとも数千百年の経歴を有する。彼等は人類の幼児ではなく、文明未発達の人類である。

すなわち彼等の心理や生活状態は、風土環境の変化や異質文化の伝播などによって、その原始状態に種々の変遷を経てきているものであることを忘れてはならぬ。J・コーレルは、その「法の一般的歴史」の冒頭において「法の始原と今日の未開民族の法とは、多くの接点をもっており、従って両者の総合的記述をすることは、相当意味のあ

ることであるが、ただ人は今日の未開諸民族において、なお最も原始的な制度が見出され、それによって歴史の最初の始原をうかがうことができると思つてはならない。地上におけるすべての民族は、長い文化をその背後にもつてゐる」と警告している。(文獻二、一頁)

例えば、台湾の原住民は、旧マライ人中のそれぞれ住地を異にした各種族が、台湾島に移動して成立したものであつて、渡島の後も、各族が相互に融和混合することなく、各自の特徴を維持し、他方、インド文化やイスラム教の影響を蒙らないまま、最近まで未開文化の古い相を保持して来た現象は、インドネシア・マライ方面の何処にも殆んど見られないところとされている。しかして、台湾原住民の社会もまた、他の未開社会と同様に、それぞれの歴史的背景を存し、社会組織および作用が、その歴史的伝統によつて左右されているに違ひない。彼等の社会も、他の未開社会と同様、それ自体の停滞性のうちに多様な発達段階の諸集団、諸思想を少からず包含しており、決して分業および交易を知らない封鎖的經濟の社会ではなかつた。ことに清領以後は平地の漢人により、日本治台以後は日本人により、多くの影響を受けるにいたつた。彼等が鉄、銃、火薬、塩、新作物多様の裝飾品などを得たのは、かような平地との交易によることが、その尤なものである。

しかし、彼等は今なお文字をもつていない。すなわち、言葉によつて横の人と人とのつながりを拘束し、また過去の言葉を現在に、現在の言葉を未来に生かすというように、縦の時間の關係で結びついてゐる現状であつて、われわれはとくに、その違反に現実的制裁(主として贖財)を科することができる、としてゐる底の契約のうちに、契約なるものの一原型に接することができると思う。

台湾原住民各族は、いずれも合意または契約については、ほぼ明確な觀念を有し、各族ともこれに相当する語があり多くは「相話す」「相語る」「話し合い」などに当る語をもつて、これを表わしてゐる。ことに、異種族または敵部族との間においてなす契約、例えばその中でも講和や和解のように重大な取極めは通常誓約の形をとる。誓約は單に双方の誓言にとどまることもあるも、時に誓式(埋石の儀など)を行うのが例である。(文獻、一六、三七二頁・三七六頁)

第二 物を與える契約

台灣原住民は、日本治台後間もなく變化をうけるに至ったが、ことに昭和以後殆ど全部の重要蕃社には、当局により、交易所が設置されるとともに、これを中心とし彼等の交易は急激な展開をみるにいたった⁽¹⁾。本稿ではその變化の著しくなかった大正六・七年頃の文獻によつて、彼等における契約（債權的な契約）の諸相を窺ふこととしたい。彼等の契約も決して單純ではないが、その主な型を分けると、物を与える契約、物を借りる契約、人を雇う契約その他となすのを適當と考える。

一 アタル族 (Atayal) では、(サイシャット族とも同様であるが) 古來、價格の標準、取引の媒介として使用された一種の貝貨を存した。この貝貨には、漢稱、珠錢(或は螺錢)といつて、いも貝、または、しやこ貝を磨いて作った円板(徑約一寸五分ないし二寸、厚さ二、三分)と、珠貨と稱して珠仔^か、という貝製小粒(徑約一分)の中央に小孔をあけた南京玉様のものを蘇糸でつないだものがある(これを長方形の布に綴つたものを珠襖^{しゅうけん}という)。

しかして漢人や日本人との取引には、外來の銅錢および銀貨などの鑄貨を用いるに至っている。しかし一般に彼等の交易は、如上の貨幣によることなく、多く物々交換を主とするものであったと思われる。(文獻一五、一一五頁—一九頁)

アタル族では、隣接の蕃社または部族が、相手の土地を銃器または珠貨をもって売買することがあった。さて彼等は時間や労力を念頭におかないから、例えば、ガオガン蕃が鹿皮を携えて往路一日でリモガンに来て食塩二十斤を得たいと欲するが十二斤より得ず、さらに一日を費してクツシャク(屈尺)に来て十五斤より換えることのできない場合に再び道を転じ二日をもってタイコカン(大料坎)に持參して、やっと十六斤の塩を得たとすると、彼等に対し、得意満面、甚だ伶俐な取引をなしたと誇る色がある。しかし、タイコカンは、往復に四日を要する上、途中に悠遊したために十数日を費すことがあつても、一斤多くの塩を得て喜ぶわけで、かような事例は少くない。(文獻二、三四四頁) 蕃人間の取引は、その交換によると、売買によるとに拘わらず、互に自己の引渡した物につき、瑕疵を担保しなければならぬ。例えば、獺犬または豚に病氣のあつたことを知らないで買入れたところその後その犬または豚がそ

の病のために斃れたときは、買主はその支払った代金を取り戻すことができる。また、銃器その他の器具に引渡し前に損所があったのを、買入れ後その損所を発見したときは、これを売主に返してその代価を取戻すことができる。とされているようである。もし、その物の瑕疵が、引渡以前に存在したか、或はその後に発生したものかにつき、両者の間に争いの生ずるときは、仲裁または首狩審によって決する。

また、アタル族には或る物につき代価の一部を交付しておき、代価の残額を交付した後に、その物を受取ることを約することがある。この場合には、その物をリナゴ（*linago*）という。売主はこれを費消したり、売却したりできないが、何時でもその受取った代価を返して契約前にかえすことができる。

なお、本族では、無償で価額の少ないものを他に与えることがある。ピヌミロフ、メク（*pinumirof meku*）という。親族や友人間に行われることが多い。贈与は、物を引渡さねば効なく、またその物が滅失したとて代物を交付するに及ばないし、その物の瑕疵も担保しない。しかし、一旦与えたときは、相手方に忘恩的行為があっても取戻すことをえない。（文獻一、二九一頁—二九三頁）

アタル族は、往時は、物貨を交易するには、平地の漢人部落に接した蕃社では直接に漢人部落に出てこれと交易するが、奥地の蕃人は、大てい途中の蕃社が仲次して、交易の利益をほしいままにした。漢人の渡来以前には、彼等は平地または海浜に住する熟蕃との間に交易を行って来た。本族のうちには新しい土地を求めて移住する場合に、平地との交換、ことに塩を得るのに便利であるということも、考えに入れるものもあったという。さて彼等は従来、漢人との交易において、漢人が損傷した物を売付けながら、代金の返還に応じないのを見て、貪欲の甚しいものとした。瑕疵担保の慣習がかえって未開人の間に存するは、興味が深い。（文獻一、二九二頁）

二 サイシャット族（*Saisiat*）では、族人相互間の売買は少い。交換または売買は、双方から同時に財物の交付を行うのを常とする。まだ手附の慣習はない。売主が買主から或る物の代金の一部または全部を受取ったときにおいても、まだその物を交付しない間は、何時でもその受取った金額を返して、売買を解約することができる。

交換または売買は、本族と漢人との間に多く行われる。この場合、互にその交付した物の瑕疵を担保することはな

い。その交付を受けた後に、損傷の箇所を発見しても、これを理由として売買を解約したり、或は追完を請求することをえないとしているらしい。

なお、本族間には、獵犬の売買につき、面白い慣習がある。犬を買おうと欲する者は、その飼主よりこれを借りて出獵し、良犬と見るときは、飼主に交渉し、その代価を定め、まず銀一、二円を与える。その後四、五回も狩獵に伴い、果して意に適するときは、肉を貯え、酒を醸して、飼主を招き、代価の残りを渡し、合飲の式を行う。もし意に適しないときは、これを飼主に返し、飼主より更に他の犬を得て再び狩獵を試みる。ただし、前に与えた銀貨は取戻すことをえない。

サイシャット族においても、贈与は少額の動産について行われる。贈与の予約は別段の効力はなく、贈与者は、何時でもこれを取消することができる。贈与してしまつた物は、他日受贈者に背恩的行爲があつても取戻すことをえない。また贈与者は、その物の瑕疵を担保する義務はない。(文獻四、一五九頁—一六〇頁)

三 ツオウ族では、(Tson) 上述の北蕃と異なり昔はただ鹿の肉・筋・または皮をもつて、布に換えたにとどまり、別に貨幣のごときはなかったらしい。漢人の領台以後、鑄貨を用いるに至つたという。

さて、ツオウ族においては、物を交換・売買・または贈与するには、判つきりとその目的物について合意があつた上、なお、その物の引渡しのあることを必要とする。単に、交換・売買または贈与を約しただけでは、その物の所有は相手方に移らない。ただし土地についての引渡しは、当事者双方が立会つてその境界を明示すれば足り、北ツオウ族では、この場合、土地神 (Akenameo) に告げる式を行う。

その式は、買主(または受贈者)から矢五本を売主(または贈与者)に与え、売主は土地神に対して、この矢と土地とを交換した旨を告げ、後相共にその土地に至り、其処の小石(畑一枚なら一箇・山二つならば二箇というように)を取り、これをスノエツアバ Sunoetsaba (赤く染めた芙蓉の皮をもつて、茅を束ねて縛つたもの)の下に置き、これに酒を灌ぎ「今我々は何々の理由によってこの土地を取るものであり、どうか今後も獲物のありますよう、負傷をしないう、悪靈または毒蛇に祟られないよう我々を守つて下さい」と祈る。土地を与える方は何も言わない。

土地の売買の例を若干あげると、明治二十五年（一八九二年）頃、ニヤウチナ社（Niyautsina）の頭目は、赤い胸襟をもつて、タコブラン蕃のタブヌアナ（Tabununa）家より、ババツ及びタナホホヤの獵場を買い求めた。また明治二十年頃、トフヤ社（Tufuya）のモー・ヤタウヨガナ（Moo Yatauyongana）は、裋袴一枚、鹿皮一枚で、或る畑地を同社のボーユ・ヤイシカナ（Boyu Yaisikana）に売渡した。また、かつてタツパン氏（Tapangui）は、トスク氏（Tosku）から、スナワナという獵場を買入れたが、このとき代価として端物・綿被（漢人の蒲団）・腕環・裋袴・銃二挺・蕃布および矢鏃若干を与えた。このときは、タツパン氏族に属する各戸より、その価を支出したが、本家のみは多分を出した。贈与の例は多くないが、かつてタツパン社のウオグ・タツパン（Uongu Tapangui）が山中で死んだのを某ヤクモガナ（Yakumogana）が、これを埋めたので、タツパン家はこれにクニヤ溪の一部を与えた。かつてタコブラン蕃で、タバシアナ家が死滅したときヤシユグ（Yasyungui）氏がこれを埋葬したので、その土地を取得した。かつてサアロア蕃がタコブラン蕃を攻撃したとき、タコブラン蕃の頭目の哀請により、タツパン蕃の頭目が、自らサアロア蕃に至り、これを諭して、攻撃を中止させた。タコブラン蕃の頭目は、これを徳とし、クニヤ溪全部をタツパン蕃の頭目に贈与したことがある（文獻六、二一九頁—二二〇頁）

ツオウ族においても、売主は、その売渡した物の瑕疵を担保する。買主は、その引渡しを受けた後、余り時日の経過しないうちにその瑕疵を発見したのである場合には、売主にその物を返し、代価を取戻すか、または他の瑕疵のない物と取換えさせることができる。

動産の売買・交換は本族間に行われることが少く、漢人や他の蕃族との間に行われることが多い。サアロア蕃が用いる蕃布は、大たい、ブヌン族より交換によって得たものである。（文獻六、二三五頁）

四 パイワン族（Baiwan）では、売買は当事主者の間において代価を協定し、その目的物を授受することによって成立する。かつ多くの場合において、売主は引渡し前における物の瑕疵を担保する。この場合買主は売主に返品して解約するか、またはその代品を受取る。

しかし、ラバル蕃上パイワヌ社やブツル蕃タラバサジ・チムル・カビヤガヌの諸社では、買主は最初十分にその品物を吟味して受取らねばならない。受取後その瑕疵を見つけても、果してその瑕疵が引渡前のものか否か判断に苦しむゆえ、一般に買主は売主に対し、その引換を求めることができないものとする。パリジヤリジヤオ蕃クスクス社の老蕃によると、買った後でその牛や豚

が死んでも、それは買主の不運で代価を取り戻すことができないが、鉄器・陶器・織物などは、その日であれば、他の品と取り換えることができる。

本族では、買主より売主に代価の一部を前渡しにおいて、売主をして他にその物を売らしめないようにすることがある。これを南部ではポツン (pokotsung)、北部ではポカルン (pokarun) という。一種の手附である。この場合、売主、買主の双方はともにその約を守らねばならないが、事由のあるときは買主は何時でも解約してその手附を取返すことができ、売主もその手附を返還して解約することができる。故なくその約を守らないときは、他の一方はその不信を責めることはできるが、別に「手附損倍戻し」ということは、多くの蕃社にはない。

交換 (nababalis) は、双方の間にその目的物を定め、互にその授受をなしたときに成立する。互にその相手方に対して瑕疵を担保する。交換は蕃人の間だけでなく、漢人との間にも行われる。

無償で物を貰い受けるのをキカブル (kikaburu) 与えるのをクマブル (kunaburu) という。すなわち贈与であつて物の授受があつて成立する。贈与者は、その物の瑕疵を担保しないとすると、一旦与えた物を取戻すことはできない。(文獻九、四〇一頁—四〇七頁)

五 アミ族 (Ami) では、もと固有の貨幣が数種あつたことが明かであるが、台湾の清領後主として清国の貨幣を用いるに至つた。(ただ南部アミ族では、近くまで巫術者の謝礼等には固有の通貨を用いたという)

さて、花蓮港序下のアミ族では売買をマツアツアカイ (matatsakai) という。合意によつて成立するも、契約の方法には、口頭・書面の二様がある。土地の売買は、漢人との間に限られ、相互に漢俗による契約書(「契字」)を授受するのを本則とする。この契字には、代書人・保証人が連署し、土地に附随する丈単(「地券」)は契字に添えて買主に交付する。

代価の支払は目的物と引換えであり、とくに大取引においてそうである。土地の引渡しは、従来頭目・老蕃と親族を立会せしめたのであるが、近來はそうでない。親友・知人間の取引では、手附の交付をもって売買の効力を生ずるものとする。

売主・買主が合意をもって目的物と代価の授受を終れば、物の所有は買主に移る。目的物の引渡の前に生じた浸水等によって生じた目的物の毀損は、特約のない限り、保管者たる売主の負担とし、引渡後の毀損は買主の負担とする。代金支払の遅延は、契約の解除（*masawaru*）の理由とはならず、買主側の陳謝で、契約を継続するのが例である。

なお、台東庁下のアミ族では、蕃人が漢人より求める物品の購買は、掛売買（*nikiamai*）であつて代価の支払は一ヶ月以上、一ヶ年以内に農産物をもってし、漢人が蕃人よりする物品の購買は、概して現金買（*maratsa*）である。

花蓮港庁下のアミ族では、土地の贈与は、口約をもってし、何等の形式を用いないし、また引渡を要件ともしない。婚姻した子女または貧困な親族に土地を贈与することは珍らしくなく。前者をパウイ（*pauma*）、後者をパシシ（*pasisi*）と云ふ。

交換はマバリツ（*mababiti*）と云ふ、日用品を求めるに農産物をもってするのは、その一例である。口約のみならず、引渡を要する。本庁下は、耕地に比し水牛が少いので水牛と耕地との交換が行われる。（文献一一、一三七頁—一四〇頁、二四七頁—二四九頁）

第三 物を借りる契約

一 アタヤル族では、耕作・狩猟或は家屋の敷地として、土地の貸借（*kubabao*）がしばしば行われる。その期間は、耕作の場合は連耕中、すなわち、その地力の尽きる二ないし四年までとする。しかし竹や果樹などの栽培であれば、その期間は、更に長い。住宅地の場合は、たとい借主の家屋が朽ちても、修繕して住みつづけるときは、貸主において、土地の引渡を迫ることができない。土地の貸借には地代（*hinipu*）を伴うことが多い。地代は土地の事情と当事者の情誼によって一定しないが、米もしくは粟を千ないし二千把を收穫しうる土地では、大てい、銀一円ないし二円であり、かつ広い土地に対しては、最初契約の時、珠裙一枚を納れるのを常とする。しかし、中には全く地代を

要せず、僅に鎌一挺、酒一甕、もしくは煙草一把を贈るにすぎないものもある。竹や果樹の栽培のように期間の長いものは、若干年の後は、採取の度毎に、その所得を地主と借地人とに平分するものがある。

漢人と接近している蕃社（タイコカン蕃、クツシヤク蕃など）では、溪流沿いの土地を漢人に貸して、水田を作らせることがあり、これをシビスラク・ピモカン（sipisaku pimokan）と云う。漢人に田を作らせる意である。この場合は無期限であるが、漢人が約定の地代を納めないときは、これを驅逐して耕地を取り上げることがある。漢人に水田を貸した場合には、毎年その收穫の幾分を取る。

つぎに、銃器・被服および器具などを借りるものは、使用の終わったとき、原形で返還するのを例とし、破損または損害を生じたときは、これを修繕して返すか、または賠償することを要する。これらの物の貸借につき、別に貸料を取る慣習はない。単に少し許りの物品を謝礼（fugaihai）として貸主に贈ることがないではない。獵犬を借りたときは、獵獲物の一部をその借主に与える。

食料品、穀類または珠貨のようなものの消費貸借においては、他日それに相当するものを、ときに謝礼として幾分その分量を多くして、返還する。

なおタイコカン・南漠・溪頭の諸蕃では、銃器・土地・ときに未婚者をもって担保とする風が、漸次発生しつつあるのが注目される。（文獻一、二八六頁—二八八頁、二九三—二九五頁）

二 サイシャット族の地域には、日本領台以前から、漢人が入り込んで来て、開墾または樟腦製造に従事したものが少くなかった。かれらは、いずれも本族の地主に対して、毎年または毎月若干の地代（漢称は賤）を納れることを約して借地したのであった。

蕃人の言うところによれば、漢人への貸借は、地代幾許を納れると定めたのみで、別段に期間を定めたものがなく、その土地は漢人が約定の地代を納れている限りは、その使用にまかせていた。ところが漢人は狭くて不信で、初めは甘言をもつて自分たちを説得するのであるが、土地を借りることができるようになると、僅か四・五年は地代を納めるが、次第に延滞して、終には全く納れなくなる。そこで蕃人は武力に訴えて、漢人を追払おうと試みたことがあると。

またビーライ社頭目タイモ・ローモ (Taimo Romo) のいうには、彼の父が大山背庄の土地を漢人の保正サモイに對し、地代として毎年牛一頭を得る約束で貸したが、五ヶ年の後は、彼はその約束を履行せず、これを自分の土地にしてしまつたと。

なお、畑として漢人に原野を貸した例は少いが、右頭目タイモ・ローモが漢人の蔡キンシュに、麻を栽培させる目的で、大寮の地を貸したときは、最初約束の時に銀十円を取り、その後毎年、稲の出穂の時分に、十円ずつを取つたという。

本族相互の間では、土地の貸借に、地代を伴うことはない。ただ豊作のときに酒をつくり、地主の氏族仲間を饗応するにすぎない。

本族は土地が広く耕作・狩猟ともに余裕があつたので、隣接他種族より土地を借り入れたことはなかった。しかし漢人やアタル族に貸した例は頗る多い。このうち漢人に貸したものは、前述のように地代を伴つたが、アタル族に貸したものは地代を伴わず、ただ土地を借りた相手方において、狩猟をなし酒を醸し、地主たる本族の一団を招いて饗応するにとどまつた。

本族がアタル族に土地を貸す場合には、後日に至り、貸借が売買かの紛争の生ずることを防ぐため、地主よりアタル族の方に一条の珠仔いんあを与える。その意味は、もし一条でも相手の方からこれを受ければ、売買といわれる惧れはあるが、自分から相手方にこれを渡しておけばその疑はなく、貸借の証が明かであるとするのである。これと同時に、地主は、広くこのことを附近の各蕃社に知らせるので、人々は、みな、地主の珠仔が借主の手元にあることを知るといふ。ビーライ社の祖先が、バスコワランの土地をアタル族の頭目に借したとき、また大正初め頃（一九一二頃）、同社の頭目がラギヤハアリンの地をメカラン社の頭目アウビン・ラツ (Aupin Rawa) に借したときも、みな、相手に珠仔を渡したという。

銃器・被服・裝飾品または器具を借る者は、使用の後、現状のままで返せばよい。貸料を取る慣習はない。もし使用中に損傷したときは修繕して返還するか、同質の代物または相当の代価を弁償することを要する。獵犬を借りたときは、犬に帰すべき獲物の分前は、犬の所有者に帰する。

消費的な貸借は少額の貨幣や米などにつき行われる。米の貸借は、收穫時を弁済の期限となすものが多い。貨幣の貸借には、期限を附したものは少く、ただ借主が、他日、財貨を取得したときに、弁済すべきものとする。利息を附

ける慣習はない。(文獻四、一五四頁—一五九頁)

三 ツオウ族では、畑地の貸借は、三、四年すなわち連耕期間である。別に地代はなく、借主は、毎年收穫を了えた後、地主を招いて酒食を饗するに止まる。しかし、漢人に土地を貸すときは、布疋・農具・銀貨などの納入を約した。北ツオウ族では、他部族の獵場を借りる場合には、毎年酒食を作って地主を饗応しなければならぬ。

金銭・布疋・穀類などの消費物を借りた者は、他日、同質同量の物を返すことを要する。また貸借に利子を附ける慣習はない。本族の間に行われる貸借は、少い価格の物(粟なら二十把位)にとどまる。

被服・裝飾品・器具を借りた者は、使用の後、その儘で返還することを要し、もし損傷または滅失したときは、同質の物で弁償しなければならぬ。本族には、別にこれについて謝礼を附するなどの慣習はないが、ただ他人の獵犬を借りたときは、その獵肉の少片を飼主に与えることを要する。(文獻六、二三五頁—二三六頁)

四 パイワン族では、貸借は土地および動産について行われる。畑地の貸借についてみると、休耕地の貸借期間はその一連耕の期間とする。本族の畑地は、施肥しないため三、四作すれば地力が尽き、耕作の中止とともに貸借が終了する。借主は、地主に対して毎年地代を払うのであるが、地代は耕作物の一部をもってする。既成の水田の貸借は漢人に対して行われ、地主は地代としてその收穫の約十分ノ四を取る。なお、未成水田の貸借については、その期間や地代は当事者の約定に任ねられる。例えばクスクス社民は、かつてテヨビジョワクの地をアミ族に貸して水田を開かせたが、このとき地主より農具・水牛を与え、最初三年間は地代を免じ、四年目から收穫の十分の二を取った。

本族において被服・裝飾品・銃器などの動産を借りた者は使用の後現状にて返還することを要し、使用中の損傷は修繕するが、同質の代物を返すか、または相当の代価を弁償する。しかし別に賃料を収める慣習はなく、獵獲肉の少量(銃器の場合)、檳榔実・煙草などを添えて贈ることがあるにとどまる。

穀類・貨幣など消費物の貸借は少い価格のものについて行われる。例えば、ブツル蕃マヌル社では織物一、二端、粟二十六把を最高とし、北パイワン蕃クナナオ社では、銀貨一、二円、粟一、二把にとどまり、同蕃ボガリド社では銀貨の貸借は、頭目間に二、三円程度で行われる。パリジャリシャオ蕃牡丹社では蕃人間ならば四、五円ないし十円、

漢人に対しては担保付で三、四十円も貸すことがある。期間は、穀類ならば次期の收穫までとか、銀貨ならば或る物品を売った時というように、初めに約定する。消費物を借りた物は同質同量の物を返還するを要する。なお、本族には、元來利子の慣習はなかったが、パリジャリジャオ蕃の一部には漢人に倣って、貸借に利子を収める慣習を生じた。同蕃牡丹社では、漢人に貸したときにのみ、一ケ年元金の三分の一を取る。同蕃クスクス社では、蕃人間における銀および米の貸借については、利子は十円につき一円、または粃三斗（米なら五升）とし、漢人に貸すときは、その期間は一年ないし三年で、毎年利子をとるという。（文獻九、四〇七頁—四一二頁）

パイワン族では、銃器・裝飾品・銀鏈その他高価な物をもって、ときには畑にある穀類や、仔豚などを担保とすることが行われている。パリジャリジャオ蕃などでは、漢人に金銭を貸す場合に水田を担保とし、その他の部族にも土地を担保とする貸借が行われるに至っている。（文獻九、三九七—三九九頁）

五 花蓮港庁のアミ族は、土地の貸借をマツアツアリウ（matasaliu）という。（イ）南勢アミでは、親族相互の困窮を救助するために下等の畑を貸すのが多い。地代を徴せず、借地人は単に收穫後、地主を招待して酒・餅・肉を饗応し、餅一枚贈るのを例とし、水田の貸借に限り、地代を要する。新移住者の生活を救うためにする水田の貸借をパカウマ（pakauma）と云う、これは何等の形式を要せず、貸借年限を口約するだけで小作料については協定しない。（ロ）秀姑巒アミ（タパロン社、マクアン社など）方面では、土地の貸借は、他人の間に行われることは少く、多くは親族間に一、二年の期間をもって（時には五、六年の期間をもって）行われるのであるが、必ず地代を徴収する。

さて、地主は、借地期間中の土地でも自由に、かつ必ずしも予告を要せずして他に売却することをうべく、また、農作物の收穫直後であれば予告をもって解約することができる。新地主は、契約を継続するの義務を負わないが、新たな条件をもって契約することもできる。地代については、南勢アミでは、米田においては一期作は借地人と地主がその收穫を折半し、二期作は借地人七分、地主三分を取るのが通例である。秀姑巒アミでは、耕作物が粟・米であるときは両者の間で收穫を折半し、甘藷・里芋などのときは、收穫の少量を地代とする。地代の怠納は、解約の理由と

なるこというまでもない。(文獻二一、一二八頁—一二九頁)

花蓮港庁下のアミ族の間では、米・粟・檳榔実・煙草のような食品類を貸借したときは、同質等量を返済するのを原則とし、謝礼を付加するに及ばない。金銭の貸借には元金額を返済すれば足り、利息を付しない。その額は極く些少で、期限は二、三日である。農具などの使用貸借については、毀損の大きな場合にかのみ賠償する。しかし牛畜の貸借は、賃料を払うのが慣例である。

消費的はな貸借は、借用物と同一のものをもって返済するのが例であり、その貸借の額は台東庁下のアミ族では一円以下が普通である。時効の觀念はなく。(文獻二一、一三八頁—一三九頁、二四七頁—二四八頁)

第四 人を雇う契約

一 アタヤル族では、助勢または手伝いをルンマオ (runmao) といひ、別に賃銀を求めないで、親族・友人または隣人が、農耕または建物などの場合に扶け合うもので、相互の情誼に出た行為にとどまる。これに對し、蕃人の間で他人に雇われて一定の賃銀を得るのは、サイホー (saho) といひが、この語は漢語の「司阜」^{サイフー}であり、初期の漢人が採腦・伐木・開墾などのために樵夫・大工・職工などを伴ひ、これをサイフーといったのに起因する。その他、蕃人間において、貧家の子女が他人に買取られ、または質に取られてその家の労働に従事するものがあり、キニヤークス (kinyatnu) と云ふ。

賃銀は、アタヤル族でカーボ (kabo) といひ、蕃社によりその額は同じでないが、概して漢人部落に近い所はその額が高く、大正三年頃で一日五十銭ないし一円に當り、奥蕃に入るほど低くなり、僅に黒木綿三尺、食塩一帽 (五、六合) またはマッチ一包 (十個) で甘んずるものもあった。(文獻一、二九七頁—二九八頁)

二 サイシャット族においては、好意をもって人の労作を助けるのをマイナハル (mainahalu) といひ、賃銀を出して人を雇うのをスミバハ (sunibaha) といふ。本族間では、開墾・建築その他他人の労力を依頼する場合は、元來、前者の方法により、助力を受けた者は助勢者に対して別に報酬を与えず、ただ酒食を作つてその勞を慰めるに過

ぎなかったが、漢人と接するに従って、後者の方法が発生した。ことに本族が漢人を雇って水田を開墾させる場合には後者の方法により、工程の進むのに従って少しづつ賃銀の内渡を行い、全部完了後にその残額を清算して渡すのが例である。(文獻四、一六〇頁—一六一頁)

三 ツオウ族においても、単に人の手伝いをなすのと、約定の報酬を得て労役に服するのとでは、用語を異にする。手伝いの場合には、手伝を受けた者は、酒食を作つてその労を謝するに止まるも、雇いの場合には、雇主は一定の報酬を与えねばならない。(蕃人同志であれば、大正五、六年頃で男一日二十錢、女十錢とし銀貸または相當物で払う。漢人との間では、一日約一円を要した)(文獻六、二三七頁)

四 パイワン族では、開墾や建築などお互にその労務を助け合うゆえ、臨時に人を雇いこれに報酬を与えることは少いが、本族と漢人またはアミ族との間には、盛んに行われるに至っている。報酬は金銭・織物・穀類などをもってする。しかし、長期間の雇傭は、頭目家が、四五年ないしそれ以上、自活の途のない孤独の平民などを雇う場合である。単に衣食を給するにすぎないが、雇人が独立したとき畑地を無料で貸したり、婚姻するとき婚資を与えたりする。(文獻九、四一二頁—四一三頁)

第五 むすび(契約の機能)

一 未開人の社会的共同は、これを血縁的共同、地縁的共同および心縁(靈縁)的共同に三大別しえよう。もちろん、かような分類は類型的な特徴づけであり、現実的には一つながりのものとして、互に他と相含みあっていることはいうまでもない。

契約の原型を、血縁的共同において見出そうとするのは、マリノウスキー(Malinowski)である。彼は、結婚およびその間に子供が出生することによって生ずる個人間の相互關係が、あらゆる法政規定の根源であると見、親子の關係、ことに結婚を法的契約の代表的なものとし「この高度に個人的な關係は……他方において情緒的依存と精神的協力」の最も微妙な色彩を生ぜしめ、人間の關係として存在するもののうちで、最も完全な經濟的共產制を当然伴っている。

るが、この協力こそは、法律上の位置および法律と他の行動の規範との關係を研究するに、最上のものである」と述べている。(文獻二七頁、四二頁)

彼の見解は、いかなる社会でも、結婚は一男一女を結びつける個人的契約であり、世界いずこにおいても結婚の集團的な契約は存在せぬという真理を示したものであるとして、台湾の原住民にも妥当する。しかし結婚關係をもって、すなわち法的關係とするには考慮を要すべきものがあるのみならず、相互に等量に奉仕し合うといういわゆる相互(reciprocity)の原則は、家族という基礎集團では、極小化して表われて來てゐるのである。親子・夫婦を中心とする家族情は、未開社会においても、非合理的なものに即しての好さの感情である。従つてそこから合理的な好さの感情としての法律感情が胚胎すると考えるのは無理であらう。しかし、契約なるものが、家族的共同において、一種の機能を果してゐることは疑を容れない。

二 地縁的共同は、家族的共同から解放された隣人的共同である。それには家族的共同の深さはないが、これを超えた広さを有する。この地縁的共同の一面は、技術的・經濟的な共同であり、他面は政治的・法的な統制・調整である。前者は土地のもつ生産性に、後者は土地の有限性・限定性に依拠する。地縁的共同は土地の共同に媒介せられ、緊密な生活共同として形成せられる。合理的に事物を処理しないことの多い未開人ではあるが、彼等は決して合理性を欠如してゐるのではなく、産物の価格の評価において、勝れた農耕技術の導入において、極めて著しい合理性を示していることが知られてゐる。つまり地縁的共同において彼等の經濟的合理性ないし相互性の社会原理が著しく働いてゐるのを見る。われわれは、この地縁的共同にこそ契約なるものの本来行われる場を見出すことができる。契約の当事者は、「隣人」として対當の關係に立つ。物を与える契約において、物を借りる契約において、また、人を雇う契約において、当事者は隣人として交渉し、交易し、助け合つてゐるのである。

隣人的共同は、土地や労働や技術の共同を通じて互いに世間的に一人前(または一人前たりうるもの)としての責任において営まれ、実現される共同である。契約の発達は、隣人的共同の目覚めであり、自覚である。ある場合には新しい集團形成の準備段階となる。契約關係においては、血縁における私情が止揚され親子兄弟の間ではみられぬ博い

公共的存在が目指される。例えば、集團がその求心的傾向のために互に封鎖的となったとき、緩かな個人關係を通してその間の連絡を保つ作用が営まれる。未開人の地縁生活にみられる合理的な好さ、好ましさの感情が、彼等の契約の根柢を支えているのである。契約は平和の媒として、未開人の地縁生活を深化するとともに他方これを拡充する機能果している。

三 地縁の共同は、隣人愛を基調とする広い協同であるが、なお地域的限定性を脱することができない。同一の種族でありながら、部族を異にすれば、他所者の意識も強く、敵味方の区別も、時に顕著である。かような地域的封鎖性を超え、更に広い公共的な共同存在が追求される。これがすなわち靈縁的・心縁的な共同である。彼と我とが、部族の区別を超えた全族的な祭祀に参加して心から相語り、或は音曲に陶醉して魂を触れ合はす。我ど彼どが兄弟にも劣らず、隣人にも増して、親しい友人となることは、未開社会においても日常目撃されるところである。かような心縁的共同の一は言語の共同である。言語の開放性は、血縁的ならびに地縁的な限定性をやぶる。言語的共同の範圍は、蕃社が蕃社に対立し、部族が部族に対して利害を守るといふような私的なものを超えた、広い空間に及ぶのである。また、血縁的共同体や地縁的共同体も、時間的な姿をもたないわけではないが、靈縁的・心縁的なそれにおいて、この時間性の展開がみられる。時間的な張りとして、一切の過去と未来を包括したところの現在の姿が、隨所に顯われているのを見逃すことはできない。(文獻三二、二二八頁—三四七頁)

未開社会においては契約が、ことに他部族・異種族との間において、最も自覺的に行われていることは、前述のごとくである種族相互間、或は周囲の先進民族との間の交易は、彼等の生活に重要な役割を営み、彼等の間に非定形な結合關係を保たしめ來った。すなわち他部族、異種族をも広く隣人として包摂しようとする機能が果されている。しかも言語的共同を表象しまたは建現するものとしての契約が、過去の言葉を現在に生かし、現在の言を將來にいかすというように、時間的な拡がりにおいて、信頼され、守られて來ているのである。契約は未開人の心縁の共同においてその空間的な拡がりや時間的な張りを担当するものの一つであつて、ここに契約なるもののもつ一種の機能、高い機能を見ることが出来る。

文獻	臨時台灣旧慣調査会	「番族慣習調査報告書」	第一卷	(大正四年)
同 一	同	「台灣蕃族志」	第一卷	(大正六年)
同 二	同	「番族慣習調査報告書」	第三卷	(大正六年)
同 四	同	同	第四卷	(大正七年)
同 六	同	同	第五卷ノ四	(大正十年)
同 九	同	同	第二卷	(大正四年)
同 一 一	同	同	第二卷	(大正八年)
同 一 五	台灣總督府蕃族調査会	「台灣番族慣習研究」	第四卷	(大正九年)
同 一 六	同	同	第四卷	(大正九年)
同 二 二	J.Köhler und L.Wenger, Allgemeine Rechtsgeschichte, Vol.I, 1914	小野訳、(一頁)		
同 二 七	H.I.Hogbin, Law and Order in Polynesia: A Study of Legal Institutions 1934	吉田訳、三八頁—四四頁)		
同 三 二	和辻哲郎	「倫理學」中卷		(昭和二年)